

# 素 顔 拝 見



予防歯科学分野・助教

岩 崎 正 則

こんにちは。2010年6月から予防歯科学分野助教を拝命いたしました岩崎正則です。

すごく簡単に自己紹介をしますと、趣味は特になく、お酒が好きです。では今に至るまでの経歴を簡単に紹介させていただきます。

新潟県上越市に生まれ、2000年高校卒業までを高田で過ごしました。その後、北海道大学歯学部に入學し、札幌で6年間過ごし、2006年3月に同大学を卒業しました。今でも仲の良い同期は多くが北大に残っていますので、一年に何回かは北海道に遊びに行っています。北海道はいつ行っても素晴らしい土地です。皆さんも是非遊びにいらしてください。

大学時代はバレーボール部に所属し、なんとなく運動を続けていました。中学、高校とバレーボール部だったので自然な成り行きで大学時代も続けていました。大学の3年生か4年生まではバレーボールサークルにも入っていましたので、自分で振り返ってみると人生の結構な時間をバレーボールに使いました。バレーボールをやっていた目的は背を伸ばすことでしたので、実際の実力は経験年数と全く比例していません。肝心の身長の方も180cmを目標にしていたのですが現在も目標には届かず、今も努力を続けています。

私が大学を卒業した年から歯科医師臨床研修が必修化となりましたので、臨床研修医として新潟大学にお世話になることになりました。研修医時代から、ほとんど予防歯科学の教室にいたことが多く、そのまま2007年4月に大学院生として新潟大学予防歯科学分野に入局いたしました。大学院在

籍中の2008年11月から2009年4月、また2009年11月から2010年3月まで米国ミシガン大学に留學し、Dr. George W. Taylorの下で勉強させて頂きました。Dr. Taylorは現在University of Michigan, School of DentistryおよびSchool of Public Healthの教授として仕事をされています。向こうでは(1)全身と口腔との関連について、特に糖尿病およびその合併症と歯周病との関連、また慢性腎臓病と歯周病との関連についての調査・研究、(2)データの処理と解析に用いる統計学についての知識を深めること、の2つを目的に勉強をしてきました。

入局当初は、留學など全く考えておらず、留學でアメリカに行くまで海外に出かけたこともありませんでした。しかし、向こうで教えていただいた先生方、また研究環境がとても素晴らしく、自分が想像していた以上に留學生活を満喫できました。今現在こうして予防歯科学分野で研究を続けさせていただいているのも、その時に得た知識・経験があるからだと思います。大学を卒業する時点では、臨床の道に進むか、大学院へ進学し、研究の道に進むか悩んだこともありましたが、今の道を選んでよかったと思います。疫学研究や、地域歯科保健といった分野に興味のある学生さんがいましたら、声を掛けてください。いつでも大学院進学等の進路相談を受けます。

最後に、大学を卒業したばかりの未熟な私を温かく迎え入れてくれ、ご指導していただいた宮崎秀夫教授をはじめとする予防歯科学分野の皆様、また関係するすべての皆様には深く感謝しております。少しでも恩返しできるよう、今後も精進してまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。

\*



硬組織形態学分野・助教

中 富 満 城

平成21年10月1日より硬組織形態学分野（旧口腔解剖学第一）の助教を拝命致しました中富と申します。縁あって旧制新潟医科大学以来の歴史と伝統あるキャンパスで研究と教育に従事させて頂き、大変光栄に存じます。

地元は北九州市の小倉です。実家から某歯科大まで徒歩15分ですが、「福岡ドームに毎日通える」という不純な動機から、平成8年に博多の九州大学歯学部に入學しました。実際私は筋金入りの鷹党で、九大在學中の6年間に130試合以上観戦に足を運び、公式ファンクラブの會員歴は今年で17年目になります。幸運にも平成11年のパリーグ初優勝は福岡ドームで、平成15年のリーグ制覇は千葉マリンド各々見届け、王監督の胸上げを直接この目に焼き付けました。昨年は新潟で開催されたオールスターを観戦し、全国で10ヶ所目のプロ野球球場訪問を達成しました。

さて祖父も父も開業歯科医なので当初は継ぐつもりで入學したもの、薬理学の山本健二教授（現名誉教授）主宰の細胞生物学勉強会に出入りする内に基礎研究に興味を惹かれるようになりました。中でも解剖実習で学んだ「複雑精緻な人体がたった1個の受精卵から作られる」という事実に感動した体験から、大學卒業直後の平成14年に東京医科歯科大学大学院分子発生学教室（江藤一洋教授・現名誉教授）の門を叩きました。ちなみに院生時代は練馬区旭町に住んでいましたので、旭町という地名に何か因縁があるのかもしれませんが。

平成18年3月に学位を得て、同年7月より英国ニューキャッスル大学人類遺伝学研究所のHeiko Peters博士の研究室にポスドクとして就職しました。留學中は主にノックアウトマウスを用いて歯の発生と口唇裂の発症機序について研究しました。研究テーマ自体が自分の興味に

ぴったり合致していて楽しかったのは勿論ですが、英国生活も存分に満喫し、生涯忘れられない思い出深い留學生活を送る事ができました。今ではニューキャッスルを第2の故郷のように感じています。そして帰国と同時に新大に採用して頂いて現在に至っています。

研究は今後も歯と顎顔面の発生学に取り組んで参りたいと思います。特に口唇口蓋裂はご存知の通り日本人を含む北東アジアで発症率が高く、口腔領域で最も頻発する先天異常ですので、「日本」の「歯学部」で研究を進める意義は大きいと考えています。教育は肉眼解剖学が中心で、私自身が学生時代に体験して現在の進路のきっかけとなった「人体の神秘への感動」を伝えられる教員でありたいと願っています。

趣味について書きますと、私は学部では九大能楽部、院生時代は東大観世会に所属して観世流の謡曲と仕舞の稽古をしていました。能楽は一生続けられる趣味であるのが利点だと思います。昨年新大に能楽研究会を結成しましたので、この原稿をお読みになっている学生さんで暇を持て余している方は是非ご入会下さい（詳細は本号の部活紹介をご覧ください）。国内・海外問わず旅行も大好きで、これまでに訪れた外国は23ヶ国に上ります。最も印象深かったのはエジプトで、ギザのピラミッドの内部にも入りました。新潟に来てからは新たな趣味としてマラソンを始め、時々やすらぎ堤を走っています。ハーフの自己ベストは1時間41分です。今秋の新潟マラソンではフルに初挑戦しようと思っています。

他大出身者から見て新大歯学部の最も素晴らしい点は学生参加型の臨床実習の堅持です。またこの歯学部ニュースの発行や学生さんの運動会・歯学祭の開催など諸活動が充実しており、教員と学生の垣根も低く、恵まれた教育環境にあると思います。私も微力ながら新大歯学部の発展に貢献して参りたいと思いますので、今後ともご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

✧

# ドイツ Bach 紀行

歯科侵襲管理学分野

照 光 真

かれこれ30年以上も J.S. Bach 好きをやっています。いつかはゆかりの地を訪れる Bach 詣でをと思いつけてきたもののなかなか機会に恵まれずにきましたが、この年末から新年によく彼の地を訪れることができましたので、最新ドイツ事情と合わせまして旅の御案内をさせていただきます。

Johan Sebastian Bach (1685-1750) は、バロック音楽の掉尾を飾る大音楽家です。バロック音楽は通奏低音の上に複数旋律が絡み合うように進行する対位法に特徴がありますが、Bach はその手法の集大成と高度な洗練化を成し遂げたといえます。しかし没後はこのスタイルの音楽は廃れてゆき一時はその存在ほとんど忘れ去られました。しかし約百年後にメンデルスゾーンによる人類の至宝ともいえる“マタイ受難曲”再演奏で偉大さが再評価され、以後の音楽家に多大な影響を与えることとなります。例えば Beethoven は“Bach (小川) というより Meer (大海) だ”と絶賛しています。個人的には西洋音楽の潮流は Before Bach か After Bach に分けられると考えています。つまり音楽史の中で Bach の創り出した世界はそれまでの多声部（ポリフォニー）音楽を統合して高みに至り一つの俊巖とした山の頂を確立し、以後音楽はその影響を受けつつ変化して大海へと流れゆく分水嶺となっているのではないのでしょうか。

さてそれでは、旅立ってみましょう。Bach ゆかりの地は、ドイツ中央から東部にかけてのチューリンゲン州からザクセン州にまたがる比較的狭い範囲に集中しています。自分が最初にこの旅を計画しつつも実現できなかったのは東西ドイツの統一1990年より以前のことで、これらの地域は旧東ドイツに属し情報も乏しく旅の計画すら立てるのに難渋したものでした。しかし現在はインターネットで宿泊、ドイツの鉄道(DB)の乗車券の予約、レンタカーからコンサートの手配まで容

易にできてしまひなんと隔世の感があります。ただドイツ語のみのサイトもありますが……(汗)。今回の旅のコンセプトは史跡めぐりというよりもいかに現代に生きる Bach に出会えるか、Bach の音楽を生み出した風土を感じることを目的といたしました。

## Eisenach (アイゼナッハ)

フランクフルトから DB の高速列車で1時間半ほどのチューリンゲンの森の北西にある人口4万人ほどの小都市が Bach 生誕の地です。住宅街の一角にある、生家と思われる築600年の民家を改築しバッハハウスとして博物館になっています。バッハハウスには音楽が途絶えることがないというおりホールでは学芸員による解説と古楽器の演奏が随時行われています。

以下写真をご参照ください。非常に繊細な音の小型チェンバロ、そして見学者参加型の手動動力源のオルガン演奏、演奏者はオルガンの裏側に立って鍵盤を弾いています。

Bach 家は地元の有力な楽師一族です。音楽史ではおなじみの図、一族の音楽家系図です。これがオリジナルなのですね。他にも貴重な文献類が多数あり、楽譜の貸し出しも行われており研究者にとっても重要な博物館となっています。

2階は楽曲の資料や、カンタータ、器楽曲、受難曲などそれぞれの楽曲テーマに沿った解説や音楽学的研究成果が音声で聞くことができます。その膨大なことといたら、1日あっても足りないでしょう。

Bach の肖像画や像はいくつかありますが、音楽室にある肖像画のイメージが強く残っているかと思えます。しかし実際にどのような顔貌をしていたのか、1894年に発見された Bach の頭蓋骨を英国ダンディー大学が解析して顔の復元を2008





古民家とモダンな建物が並ぶバッハハウス(上左)、レクチャーとチェンバロ、人力オルガン演奏(上中右)。おなじみバッハ肖像(下左)、1895年発掘された頭蓋骨(下中左)、セファロ分析!? (下中右)、復元した顔貌です(下右)。



冬山小登山でヴァルトブルク城へ(左)、ルターが新約聖書のドイツ語訳を行った部屋(中)、氷点下の熱き講義(右)。

年に行っています。これがBachの側貌、接端咬合で下顎前突、再現された雰囲気としては繊細な芸術家というよりもがっしりとしたおっさんのような……(失礼)、みなさんはいかがご覧になりますか。

さてBach少年は10歳にして両親を亡くし長兄を頼りオールドルフへ移動してEisenachに別れを告げます。その後各地で、音楽の修業を積みアルンシュタットで18歳の時教会オルガニストの職を得ます。以降Bachは宮廷音楽家として活躍する時期もありましたが基本的にはルター派教会での活動を続けてゆきます。Eisenachのもう一つの注目は宗教改革の中心人物マルティン・ルターが学び、1521年に新約聖書のドイツ語訳を行った地でもあります。

当時弾圧を受けたルターはヴァルトブルク城に籠りわずか8ヶ月でギリシャ語からの翻訳を烈火

のごとく行います。Eisenach郊外の山にヴァルトブルク城はあり多くのドイツ人が訪れます。この中世の城はドイツ精神史の源流ともいえる役割を果たし、日本でいえば奈良のような心のふるさとなのかもしれません。ただ部屋の中は氷点下の寒さながら、ガイドの女性は非常に熱く長く語り、彼らの誇りを強く感じさせました(芯から冷えます)。こうしたルターのおひざ元で育ったBach少年が深い宗教観を形成していったことは想像に難くありません。

#### 東へ

アウトバーンをメルツェデスで疾走。ドイツでは高級車でもマニュアルミッションが普



通、エコでクリーンなエンジンはディーゼルです。ただし意外に低速トルクがなく、よくエンストしました（運転へた）。

### Leipzig (ライプツィヒ)

Bachはワイマールやケーテンといった街で多くの作品を残してゆきますが、後半生27年間にわたり過ごしたのがLeipzigです。市とニコライ教会、トーマス教会の音楽監督（カントル）の職にあり教会音楽の作曲、トーマス教会合唱団の指導などにあたりました。主な活動の場であったトーマス教会はBachの墓が祭壇にあり訪れる人々により花が手向けられています。ここを目の前にいたしますと、とうとう！ ついに！ ここへ、深い感慨にひたってしまいます。

トーマス教会では、礼拝やコンサートが公開されています。訪れたのはちょうど正月、クリスマス・オラトリオの演奏を聴くことができました。1734年にトーマス、ニコライの両教会で初演された全6部からなる連作カンタータで、教会暦のクリスマスから顕現節（1/6）の間の日曜に演奏されます。教会音楽はCDで聴くものとはおおよそ別もので、なんというかとても実用的なもので、地上と天界を結ぶ媒体のようなものでしょう。その場に居ながらにして神の世界を出現させる高次脳機能および情動系の刺激システムとも言えましょうか。演奏はソリスト兼合唱団、指揮者兼エバンゲリスト（福音史家）のシンプルな編成なが

ら、声と言葉の力を強く感じさせる奏楽で、天上の世界と時空を超えたBachの時代を彷彿とさせる至福の時でありました。

そしてLeipzigには世界最古の民間オーケストラであるゲバントハウスオーケストラがあります。そうそうたる常任指揮者の肖像画がロビーに掲げられ、かのメンデルスゾーン、ワーグナーをはじめ戦前戦後の大指揮者フルトベングラーもこのオーケストラを率いています。大晦日に現常任指揮者のリカルド・シャイーによるBeethovenの第9のチケットがとれました。観客の皆さまはかなり正装の方が多く、この時間と空間は特別なものだという演出を聴く側もしております。演奏はさながらロックコンサート、えっ第9ってこんなだった!? 強烈な縦ノリなリズムに引っ張られ、さらにオケも合唱も絶対的な音量が大きくて全奏部ではホールがビリビリ震えて、それはもう盛り上がること、フィーバー（死語）いたしました。最後はもちろんスタンディングオベーションで締めくくりです。特に女性の声の力強いこと、まず体格から違い、東洋の繊細できれいな女声合唱と比べると別物です。Bachも“人の声は神が贈り賜うた最高の楽器”と言っておりますが、こうした音声言語的特徴をもった民族を基盤にドイツ音楽は成り立っているのでしょう。もっともドイツの女性は家庭でも社会でもほんとに強いらしい。



トーマス教会の夜景（上左）、ついに来れりバッハの墓（中）、クリスマスオラトリオ練習中（下左）、リカルド・シャイーによる熱狂の第9（上右）、ゲバントハウスオケを率いた巨匠フルトヴェングラーと筆者（下右）。

## Dresden (ドレスデン)

旅の終わりにどうしても行きたかった街が Dresden です。ザクセン選帝侯、アウグスト I、II 王により繁栄を築き“ドイツバロックの真珠”、“百塔の街”とうたわれた文化都市で、音楽的にはイタリア音楽の影響を受けたプロテスタント教会音楽が花ひらいていました。Bach はたびたび Dresden を訪れ、この地に職を求めようと選帝侯に曲を献呈しているほどです。この選帝侯はポーランドへ領土拡大のためにプロテスタントからカトリックに改宗までしてしまい、おかげで Bach はラテン語によるカトリックのミサ曲を残すことになります。その長大な口短調ミサ曲は逆に歌詞のストーリー性に縛られることなく、多くのカンタータとは異なって純粋に抽象的かつ芸術的な宗教音楽として世に残ることになります。

Dresden で見逃せないのはイタリアの大聖堂のようなドーム型の 1 万 2 千トンにも及ぶ石の大天井を持つ Frauen 教会で 1743 年に完成し Bach もそのオルガンを弾いています。しかし第 2 次大戦の末期 1945 年の英国空軍主導による悲惨きわまるドレスデン大空襲でドイツバロックの真珠は完膚なきまでにたたき壊され、東京大空襲に並ぶほどのおびただしい人命が失われることになります。業火に焼かれた Frauen 教会は空襲の 2 日後に力尽きるように瓦解します。

この空襲は映画“ドレスデン 運命の日(2006)”のモチーフとなっています。瓦礫の山となった教会がよみがえるのはなんと 60 年後の 2005 年、目の当たりにするとよくぞ蘇ったと思うと同時に、二百数十年前にこの大建造物を作った人の英知に啞然とし、焼け焦げたまま残された外壁に、戦争って……とやるせなさを禁じえません。

ちょうど夕刻に教会の鐘が鳴り響き三々五々地元の方々が集まり始め、新年の礼拝に参列することができました。Bach のオルガン曲が高い天蓋



フラウエン教会復活せり(左上)、ドイツバロックの真珠、ドレスデン(右上)、頭上には嗚呼大天蓋が(左下)、息をのむ祭壇(右下)。

から降り注ぎ、さらにオルガニストは現代オルガン曲の即興を奏で、共に歌い、牧師のおことばをいただき聖なる時間と空間を肌で感じるようになります。

行ってみて聴いてみて、ドイツ的なもの、Bach 的なものを文献では得られない非言語、直感的レベルで感じた貴重な経験でした。おまけに味わってみてビール、パン、コーヒーは安くて文句なしに美味しい、そういえば Bach の時代にコーヒーが大流行してコーヒーカンタータという“コーヒー好きの娘にいかにもコーヒーをやめさせるか”をテーマにしたお堅いイメージの Bach らしくない曲もあります。現在でもドイツ人はコーヒー好きで、アメリカに次ぐ世界第 2 のコーヒー豆輸入国とか。

ともあれ“いつかは何とか……”の旅は本当になにかのきっかけが大切です。この旅の後押しをしてくれた妻に感謝をいたします。